2007 年度 修了

「まことのさいはひ」を索めて生きるということ
――宮沢賢治を読む――

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
永井　華子

人には「まことのさいはひ」を索めて生きたいという想いがある。だが「まことのさいはひ」とは何か。宮沢賢治は言う。「求道すでに道である」と。それは、『銀河鉄道の夜』でジョバンニが求道を行くために手にした、「どこまでもどこまでも行ける切符」そのものである。では、私たちはどうすればジョバンニが手にした切符を手にすることができるのか。賢治はこう問う私たちに対して、「虹や月あかりからもらってきた」「ほんたうの」「おはなし」を差し出す。賢治が「おはなし」をもらうために身を置いた四次元空間こそ、「まことのさいはひ」を見出しうる銀河である。この生と死の境目で、賢治の物語に登場する多くの人物たちが自己変容を遂げていく。

本論文は、時空間の境目を通過し「まことのさいはひ」を索めて生きるための切符を手にする主人公たちの変容過程を、「通過儀礼」の視点から読み解いたものである。

第一章では、『銀河鉄道の夜』のジョバンニの変容過程に着目した。彼の通過儀礼に酷似したアメリカインディアンのラコタが行なう通過儀礼との比較を行い、ジョバンニの脱魂型通過儀礼としての特異性を見出した。

第二章では、切符を手にしたジョバンニがいかにして三次元空間に戻ってくるかを考察した。彼は志を得るために、自らの内に秘めた小宇宙の全エネルギーを燃やし、母親の胎内である銀河を走り抜けた。そして、内なる小宇宙で母なる大宇宙を突破することよって三次元空間に産まれ出で、切符を手に彼は再び走り出す。

第三章では、『ポラーノの広場』のキューストの、「まことのさいはひ」をまっすぐに索められない、その葛藤に迫った。山羊や子どもに導かれてたどり着いた四次元空間は、「まことのさいはひ」を索め作り上げようと奮闘する人々が生きる共同体であった。“社会構造の裂け目”を通過するキューストは、ポラーノの広場が持つ神秘性や真実性を体得することができた。だが彼がそれ以上なしえたことは、ただ「暗い巨きな石の建物のなか」で経験を「書き付ける」ことだけであった。

第四章では、賢治が自らの物語を「虹や月あかりからもらってきた」「ほんたうの」「おはなし」だと主張することに着目し、「まことのさいはひ」との関連性を考察した。賢治は自ら「修羅」となり、三次元空間と四次元空間の境目に入り込むことで「心象スケツチ」をした。修羅となって入り込む境目こそ、「まこと」の生命現象を示しうる神秘が宿る場所なのだ。この物語を、私たちが「すきとほったほんたうのたべもの」として食べるには、記録された「おはなし」に宿る生命現象を体験しなければならない。記録を読み、自分が生命現象の一つとして銀河に包括されていることを知ることにより、「おはなし」を食べられる。私たちはこの志を、銀河に旅立つ最愛の人に託すことができるのではないだろうか。